はじめに

ナラ枯れは、カシノナガキクイムシがナラ類、カシ類、シイなどのブナ科樹木に穿孔して病原菌を媒介することにより、樹木が集団的に枯死あるいは衰弱する病気です。1980年代以降日本海側からナラ枯れ被害が拡大し、近年では全国各地に広がってきました。これまで様々なナラ枯れ対策法が開発・提案され、地方自治体、ボランティアやNPOなどの市民団体が森林管理やナラ枯れ防除に取り組んできました。

しかし、ナラ枯れが発生した場合、実際にナラ枯れ被害木の全部を駆除できる地域は多くありません。ナラ枯れが広がってしまったが、防除が追いつかないと森林は将来的にどのような姿になってしまうのかといった疑問や、被害が発生しても将来的に森林が回復するのであれば、ナラ枯れを積極的に防除しなくてもよいのではないか、といった意見も寄せられています。

そこで、With/Post ナラ枯れ戦略コンソーシアムでは、生物系特定産業技術支援センターイノベーション創出強化研究推進事業（体系的番号 JPJ007097）「With/Post ナラ枯れ時代の広葉樹林管理戦略の構築」（課題番号 04021C2）のプロジェクトにおいて、ナラ枯れ跡地の森林更新状況を調査した事例を収集してとりまとめ、落葉ナラ林と常緑シイ・カシ林のそれぞれについてナラ枯れ跡地の更新判定を行うためのフロー図を作成しました。ナラ枯れが発生した森林を今後どのように管理していけばよいか、地方自治体や森林管理者の皆様が判断する際に参照いただければ幸いです。

With/Post ナラ枯れ戦略コンソーシアム

代表機関 国立研究開発法人森林研究・整備機構

研究統括者 森林総合研究所企画部研究企画科 北島博

表紙写真

神奈川県横須賀市のナラ枯れを受けたマテバシイ林

上：マテバシイの林冠部は枯死しているが林床には多くのカラスザンショウの実生が見られる。

下：樹冠は枯れていても、萌芽枝が発生している。

2020年11月北島博撮影。